

第五章 富士山と信仰

第一節 富士山への信仰登山の広がり

中世の富士山の各登山口

富士山へ信仰を目的とした登山参詣を行うため、駿河国側には表口（大宮口・村山口）・須山口・須走口、甲斐国側には吉田口と船津口（河口）の各登山口が開かれた。これら各登山口を起点に富士山頂へ向けて登山道がつけられたが、登山口には大宮・村山・須山・須走・吉田（上吉田）・河口といった拠点となる集落が形成されていった。どの集落にも浅間社が祀られており、そこを中核として周辺に参詣者を受け入れる宿坊が営まれていた。船津口は一四世紀初めには山崩れの影響で廃されたようだが、河口集落はその後参詣者を受け入れている。集落の宿坊は、大宮口は富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）の社人衆、村山口の場合は富士山興法寺（以下、興法寺）の衆徒、須山口・須走口・吉田口・河口の場合は御師が担っている。

第一節では、以上の各登山口から信仰登山を果たした諸国の参詣者が富士山内に奉納したと思われる中世の信仰遺物を確認したい。具体的には懸仏（御正体）、仏像類（明治時代初期の廃仏毀釈に伴い山中から降ろされた下山仏を含む）などから、一六世紀以前のものを表裏一々に整理した。これらの中には過去の文献でのみ存在を把握できるものもあって、現物が伝来するものは意外に多くはない。その理由は、廃仏毀釈の影響以外にも毎年常に風雪雨にさらされる富士山の過酷な自然環境が影響している。現存する信仰遺物に鑄造物が多いのもこうした理由からであろう。



図 5-1 富士山周辺図（野中至編『富士案内』所収「富士山近傍実測図」をトレース）

付番	年	月日	奉納物	場所	銘文	出典・所蔵
①	長久2年(1041)	6月1日	髷口	吉田口五合五勺六小屋カ	長久二年六月一日	『駿国雑志』巻31中
②	文治5年(1189)		日本武尊像	吉田口二合御室カ	伊豆国走湯山住侶覚実堂台坊、文治五年造立	『駿国雑志』巻31中、『甲斐国志』巻35山川部16
③	建久3年(1192)		女体合掌像	吉田口二合御室カ	覚実堂台坊、建久三年造立	『駿国雑志』巻31中
④	正嘉3年(1259)	正月28日	大日如来坐像	表口村山	敬白奉造立俱金頭大日如来壹体、正嘉三年未午正月廿八日、願心聖人覚尊・口日・仏師聖運	村山浅間神社蔵
⑤	乾元2年(1303)	7月	地藏菩薩立像	頂上初徳打場	富士禪定乾元貳年癸卯七月吳施主益頭庄沙弥光実・同比丘尼	個人蔵
⑥	至徳元年(1384)	8月	大日如来二尊像 懸仏	須走口六合	相州糴矢庄大竹郷、富士浅間大菩薩、至徳元年甲子六月十九日、願主来賢	小山町教育委員会保管
⑦	応永24年(1417)	8月	不動明王像	表口岩屋不動カ	奉納富士山、雲切不動尊、応永廿四年八月、当国内谷住、形部大夫光国、誓願寺範蔵主敬白	村山浅間神社蔵
⑧	応永32年(1425)	6月1日	大日如来懸仏	頂上カ	敬白奉納 富士山内院御正体、南無浅間大菩薩、上野介満範、本云応永三十二年乙巳六月一日別当叡運、于時文明八年丙申六月一日満範孫子、別当中納言阿闍梨良清	中町浅間神社蔵
⑨	文安2年(1445)	8月日	大日如来坐像	不明	法善教覚、大和吉人、敬白奉富士山立大日一尊、下野国小山庄夫王上宿住人願主法善永金、助成道見、同弥口郎、文安貳年八月日	蔵春山主持院蔵
⑩	文明10年(1478)	3月21日	大日如来坐像	表口村山	(胎内腹裏)奉造立金剛界大日尊形再興、大檀那大淵之住人度辺清左衛門尉生年三十一才、戊三月廿一日、大宮司前能登守忠時、同子息親時、(胎内背裏)富士山興法寺衆徒等、大工矢沢良太郎、寺務大鏡坊成久四十四才、於此坊造也、仏師度辺源之行忠、息行充・栄長、当寺家法明坊重報五十八歳、駒房子八才、阿伽井坊呼志、峯坊永實、池西坊成口、(胎内右脇腹裏)清水坊毫成、中尾坊形部公、大式公秀瑒、加州榮収浄富、(鉢幹材膝前部)文明拾年三月廿日於大鏡坊作之、委細御身之内二書留也、(膝裏部)承仕三人、浄重・了円・慶円	村山浅間神社蔵
⑪	文明14年(1482)	6月日	虚空蔵菩薩懸仏	頂上三島ヶ岳	八体内、総州菅生庄木佐良津郷、大工同旦那和泉守光吉、文明十四年壬寅六月日、本願源春	富士山本宮浅間大社蔵
⑫	文明14年(1482)	6月日	銅造不動明王懸仏	吉田口七合目カ	八体内、総州菅生庄木佐良津郷、大工和泉守光吉、旦那内匠助泉重、文明十四年壬寅六月日、本願源春	ふじさんミュージアム(富士吉田市教育委員会)蔵
⑬	延徳2年(1490)	5月12日	大日如来鉄像	頂上剣ヶ峰カ	檀那真壁久朝、白川弾正少弼政朝在判、延徳二稔庚戌仲夏十二日斑目安芸入道宗祥、同兵部少輔政基、安達大宮正蓮妙心、佐古日善口祐泉道音妙參	『甲斐国志』巻35山川部16で十一面観音鉄像とするものを指すか、また剣ヶ峰下にも寛永元年(1624)伊勢国渡会郡より奉納の大日銅像が1体ありとする
⑭	明応2年(1493)		観音菩薩坐像	頂上東斎の河原(初徳打場)カ	[]張国海西部、[]奉鑄之者也、[]応季癸丑、[]月十六日、[]大宮司親時、[]主津嶋住口左衛門太郎、大工河口国傘林住左衛門尉	経栄山題經寺所蔵、『甲斐国志』巻35山川部16で十一面観音鉄像とするものを指すか
⑮	明応2年(1493)		大日如来鉄像	頂上東斎の河原カ	明応二年、於尾州鑄之	『駿国雑志』巻31中
⑯	明応2年(1493)		十一面観音像	頂上東斎の河原カ	明応二年、尾張人建立	『駿国雑志』巻31中
⑰	明応4年(1495)		大日如来鉄像	頂上表口大日堂カ	願主富士山興法寺辻之坊覚乘、尾州中島郷於今崎郷奉鑄此尊也、松本有阿、檀那等毛利広氏並二明室等光大姉雅称野々村妙光、明応四年乙卯五月廿六日、重吉道見、永家妙蓮、清久妙永、先達貞信、今枝定金、重延僧都任秀	『甲斐国志』巻35山川部16では大日鉄像が2体ありとあるが、同書には銘文記載は1体のみ
⑱	文龜3年(1503)		懸仏	頂上の岩窟カ	文龜三年所鑄	『駿国雑志』巻31中
⑲	大永2年(1522)		銅首鉄身大日如来坐像	頂上東斎の河原カ	大永二年、尾張人建立	『駿国雑志』巻31中、『甲斐国志』巻35山川部16で紹介する㊦を指すか
⑳	大永8年(1528)	5月13日	銅首鉄身大日如来坐像	頂上東斎の河原カ	尾州海道郡富田庄江西郷、野間弥三郎、大永八年戊子五月十三日、藤原敏久	『甲斐国志』山川部『甲斐国志』巻35山川部16
㉑	天文2年(1533)		地藏菩薩像	吉田口五合五勺六小屋カ	天文二年	『駿国雑志』巻31中
㉒	天文3年(1534)	5月3日	稻荷社棟札	吉田口五合カ	奉寄進富士山中宮、旦那太田右衛門三郎宣定、本願頂仙、天文三年甲子五月三日	『甲斐国志』巻35山川部16
㉓	天文4年(1535)	6月1日	大日如来懸仏	不明	武州大里那佐谷田郷住居願主、松寿、藤原長茂、午子、辰子、梅子、菫子、松子、午子、駒寿、満吉、泰信、平賀十蔵、妙祐、天文四年乙未六月一日	天野政徳随筆、『駿国雑志』巻31中も同様のものを指すか
㉔	天文12年(1543)	5月16日	大日如来像	頂上剣ヶ峰カ	天文十二年五月十六日、濃州可鼻郡上任戸右衛門、金谷村人形九郎治郎	『甲斐国志』巻35山川部16
㉕	天文12年(1543)	6月	薬師如来懸仏	頂上吉田口・須走口薬師堂カ	武州児玉金屋中林常貞、天文十二年癸卯六月日	個人蔵
㉖	天文22年(1553)	5月吉日	銅首鉄身地藏菩薩像	吉田口五合五勺六小屋カ	尾州日羽郷先達、天文廿二年五月吉日	『甲斐国志』巻35山川部16、同小屋に無銘の地藏菩薩鉄像もあり
㉗	永禄3年(1560)	4月12日	懸仏	吉田口五合カ	奉立願三十三度参成就、子孫繁栄故也、富士浅間大菩薩、永禄三年庚申四月十二日奉鑄所也、上野州群馬郡大工小島弥右衛門尉定吉、総社之住人敬白	『駿国雑志』巻31中、『甲斐国志』巻35山川部16
㉘	天正19年(1591)	6月吉日	大日如来懸仏	吉田口・須走口八合大小屋カ	大日尊奉納富士岩、駿州有度郡横田住人河村三郎右衛門、天正十九年辛卯六月吉日、大工家政	『甲斐国志』巻35山川部16、上ノ小屋に無銘の地藏菩薩鉄像(汗かき地藏)もあり

表 5-1 富士山内の信仰遺物 (16 世紀以前)

富士山内の信仰遺物

表5-1を参考に富士山内への信仰遺物の奉納を確認すると、江戸時代の地誌『甲斐国志』に記述のある吉田口二合の御室浅間社にあってと伝えられる②文治五年（一一八九）の日本武尊像、③建久三年（一一九二）の女体合掌像、また村山口の④正嘉三年（一二五九）銘の大日如来坐像といった鎌倉時代の仏像類は、いずれも「覚」の通字を持つ者が寄進に関わっている。御室浅間社の二例は、伊豆走湯山僧の寄進によることが記されているが、村山口に奉納された一例も同じ「覚」の通字を持つ者が関わっていることから、富士山の各登山口は、鎌倉時代初期までには伊豆走湯山（現熱海市の伊豆山神社）を本拠にする修行者によって、山岳修行の地として開かれていったことが考えられる。平安時代後期の久安五年（一一四九）に富士山頂に一切経を埋納し、村山口の興法寺で大棟梁権現として祀られた末代上人も、走湯山で修行した僧と伝えられている。

現在確認できる富士山内へ奉納された信仰遺物は、当初納められた場所から移動している可能性も考慮しなければならないが、表5-1では奉納者が諸国に広がっている様子を確認できる。富士山南麓の表口との関わりで言えば、⑭明応二年（一四九三）銘の観音菩薩坐像（写真5-1）と⑰同四年（一四九五）の大日如来鉄像に注目したい。いずれも山頂への奉納事例であるが、⑭は大宮口の浅間大社の大宮司富士氏、⑰は村山口の興法寺辻之坊が関わって尾張国で制作されたもので、その背景として、表口は東海道の西側となる東海地方の諸国との関係が深かったことをうかがわせる。さらにいえば、諸国の奉納者による奉納を仲介する役割を担った現地の浅間大社神職や興法寺の修験者は、この時点ですでに諸国に活動拠点を各々別々に形成していた可能性が高いのではないか。

興法寺の本堂に相当する村山浅間神社境内の大日堂に安置される⑰



写真 5-2 銅造不動明王像
(村山浅間神社大日堂蔵)



写真 5-1 観音菩薩坐像・大日如来坐像
(柴又帝釈天題経寺〈東京都葛飾区〉蔵)

銅造不動明王像（写真5-2）は、かつて鍍金が施されていた様子を
確認できる。また、背面に銘文が刻まれており、心永二四年（二四一七）
八月に富士山雲切不動尊に奉納されたものとわかる。この不動明王像
であるが、表口の行場の一つ岩屋不動に関わるものと考えられる。岩
屋不動は、入口が高所の洞窟（岩屋）となっており、雲切不動尊はこ
の洞窟内部に祀られていたものと思われる。背面の銘文から「当国内
谷住」の形部大夫光国と誓願寺範蔵主によって奉納されたものとわか
るが、この両名は藤枝市岡部町内谷の住人と思われ、誓願寺も内谷に
存在している。

市内東町の浄法山大頂寺には、富士山からの下山仏と伝えられてい
る胎藏界の②銅首鉄身大日如来坐像（写真5-3）が安置されている。
頭部・両肩先を銅造、体部・脚部を鉄造とする仏像彫刻は、平安時代
後期にさかのぼる類例があるが、異なる材質を用いる理由として、礼
拝像として重要な面部に鍍金を施すことを意図した可能性が指摘され
る（静岡県富士山世界遺産センター 二〇二五）。

中世に富士山への信仰は、関東地方にはかなり広く浸透していたこ
とも読み取れる。小山町教育委員会保管の⑥至徳元年（二三八四）六
月一九日銘で金剛界・胎藏界の大日如来を陰刻する大日如来二尊像懸
仏（写真5-4）は、須走口登山道の旧六合目（現七合目）付近にて、
明治四二・三年（一九〇九・一〇）ごろに偶然掘り出されたものであ
る。この懸仏の裏面より、奉納者は相模国糟矢庄大竹郷（現神奈川県
伊勢原市）の来賢という人物であることが分かる。また富士浅間大菩
薩の御正体とあって、中世の神仏が習合していた時代において、大日
如来が富士山の祭神（富士浅間大菩薩）と認識されていることを確認
できる。さらには、銘文の日付が富士山の開山日である六月一日以降
の一九日となっており、実際に信仰登山を行った際に奉納された可能
性を想起させることでも注目したい（静岡県富士山世界遺産センター



写真 5-3 銅首鉄身大日如来坐像（大頂寺蔵）

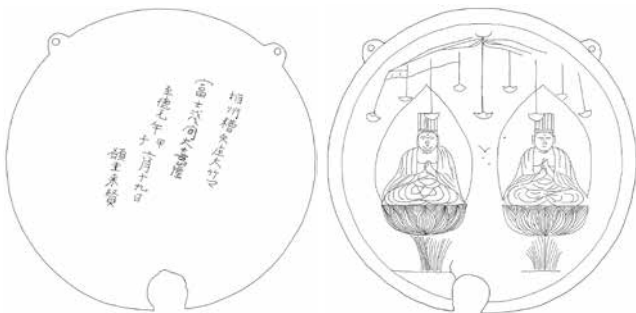


写真 5-4 大日如来二尊像懸仏（小山町教育委員会保管）
下段は実測図（縮尺 1/7 右下：表、左下：裏 時枝務氏作図）

二〇一八。

埼玉県越谷市の中町浅間神社には、⑧大日如来懸仏（写真5-5）が伝来する。この大日如来懸仏は、円形に加工した木形の正面・側面に銅板鍍金張りをして成形されているが、背面の部分までは銅板は被せられていない。背面の部分の銅板は剥がされ、内部の木形が露出しているが、この露出した木形の部分に墨書銘文が記されている（写真5-5左上）。

墨書銘文は「梵字（悉曇文字で信仰される仏や神などの尊格を表す）九字」を含めて全て同じ筆致で記されており、「梵字九字」は富士山頂の噴火口（内院）に鎮座すると考えられていた八葉九尊と呼ばれた九体の仏を、一文字ずつ梵字（種子真言）で表している。また「富士山内院御正体」とあることから、富士山頂に奉納されていた可能性がある。梵字中央の一字は「バン」で金剛界大日如来、その周囲を円形に「バン」の真上から時計周りに「アーク」、「ア」、「ウン」、「カ」、「タラク」、「マ」、「キリク」、「ヤ」と配されている。

この大日如来懸仏は、応永三年（一四二五）に満範と叡運によって奉納されたものを文明八年（一四七六）に満範の孫である良清が修理したものか、あるいは文明八年に良清が再度制作し直したものかは即断できないが、背面の木形の墨書は文明八年に良清によってまとめ記されたことは間違いない。ただし、この懸仏が、本当に応永三年に山頂へ奉納されていたかどうかは定かではない。また仮に奉納されていたとしても、文明八年以降に再度山頂へ奉納されることはなかったのではないか。それゆえに山頂で朽ちることなく伝来した可能性が高い。

墨書銘文に登場する奉納者であるが、鎌倉公方の家臣で古河城主や栗橋城主をつとめた野田氏に「範」を名前の一字に引き継ぐ人物が確認できることから（古河歴史博物館 二〇〇三）、野田氏の可能性が



「梵字九字」部分

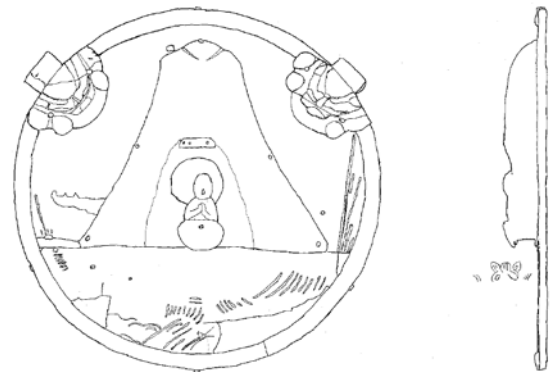


写真 5-5 大日如来懸仏（中町浅間神社蔵）
右上：表、左上：裏
右下は表と断面の実測図（縮尺 1/5 時枝務氏作図）

あると考えておきたい。そうすると孫の良清も野田氏の一族ということになってこよう。応永三年の叡運と文明八年の良清が所属した寺院は不明であるが、ともに別当職にあり、同寺院において血脈を継承した関係性になるものと思われる。

この大日如来懸仏は、一五世紀初めごろに関東地方の武蔵国埼玉郡周辺で富士山の信仰圏がすでに形成されていることを確認でき、野田氏というこの地域の有力な武士が奉納に関わっていた可能性が高いことと、歴史的にも貴重な資料であると言えよう。

浅間大社所蔵の①銅造虚空蔵菩薩懸仏(写真5-6)は、昭和五二年(一九七七)七月二〇日に富士山頂の三島ヶ岳付近で出土したもので、その後昭和六〇年(一九八五)に浅間大社へ奉納された。懸仏本尊の虚空蔵菩薩上部には宝珠形を呈する天蓋が刻まれており、その下に横書きで「八鉢内」とあり、富士山頂八葉の峰々の八カ所に奉納されたものの一つであると考えられる。

「八鉢内」という銘文のある懸仏は、ほかにふじさんミュージアム蔵の②銅造不動明王懸仏(写真5-7)が知られているが、銅造虚空蔵菩薩懸仏と同年月日に同じ地域、本願(企画者)が関わった事例であり、富士山頂八葉の峰々それぞれに相当する本地仏を懸仏(御止体)として奉納していたことがうかがえる。

二つの懸仏は、上総国菅生荘木更津郷(現千葉県木更津市)という地名と、鋳物師の棟梁である和泉守光吉が鋳造したこと、文明一四年(二四八二)六月に、源春が本願となって勧進活動を行い、奉納したことがわかる。富士山頂への奉納物と考えられるので、実際にはどの登山道を経由して奉納されたものかは判断できないが、一五世紀初めごろには、上総国に富士山を信仰する結果が形成されていたことを知り得る貴重な事例と言えよう。



写真 5-6 銅造虚空蔵菩薩懸仏(浅間大社蔵)
下段は表と断面の実測図(縮尺 1/6.3 時枝務氏作図)



写真 5-7 銅造不動明王懸仏(ふじさんミュージアム蔵)
下段は表と断面の実測図(縮尺 1/6.3 時枝務氏作図)

第二節 末代上人と富士山修行

末代上人造営の三島ヶ岳経塚

末代上人（以下、末代）は一二世紀代に活躍した宗教者である。末代は富士山の頂に一切経の埋納を主導した人物で、彼の経典埋納に関する記事が『本朝世紀』に残る。彼はさらに、富士山とともに日本三靈山に数えられる白山でも活動していたと考えられている。

末代が埋納したという一切経とは、仏教の開祖である釈尊の教え（経）や教えの解釈書（論）、修行者が守る規則（律）など全てを指し、そのほかにも仏教に係る伝記や記録も含まれている。末代により、その大量の経典類を埋納した痕跡（経塚）が、富士山頂火口縁三島ヶ岳の脇にある三島ヶ岳経塚と考えられている。

この経塚は、昭和五年（一九三〇）八月初旬、富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）奥宮の参籠所建設に従事した作業員により発見された。建設資材用の砂礫採取のために三島ヶ岳の麓を削った際に、木槨・経巻軸・銅器・土器などが出土した。八月一六日には経筒三点、多数の経巻と土器・鉄製品が出土した。これらの出土地点は三島ヶ岳の北東裾部で、浅間大社所蔵写真には遺物出土位置が×印で示されている（写真5-8）。この件を神職から聴取し、学会に初めて報告したのが佐野武勇である。この際に発見された遺物は現在所在が不明で、佐野の報告や足立鋏太郎の分析、浅間大社所蔵の写真を中心に分析が行われた。佐野の報告によれば、埋経施設と推定される木槨は厚さ約一二〜一五cmの灰、炭などの層の下から発見された。木槨の板材は厚さ六cmくらいで約一五〇cm四方であったが、腐食が進み、内部には経巻の軸と思しきものの腐朽したものが数百本埋蔵されていたという。この木槨の外側には土器が並列し、さらに銅製水瓶も出土している。

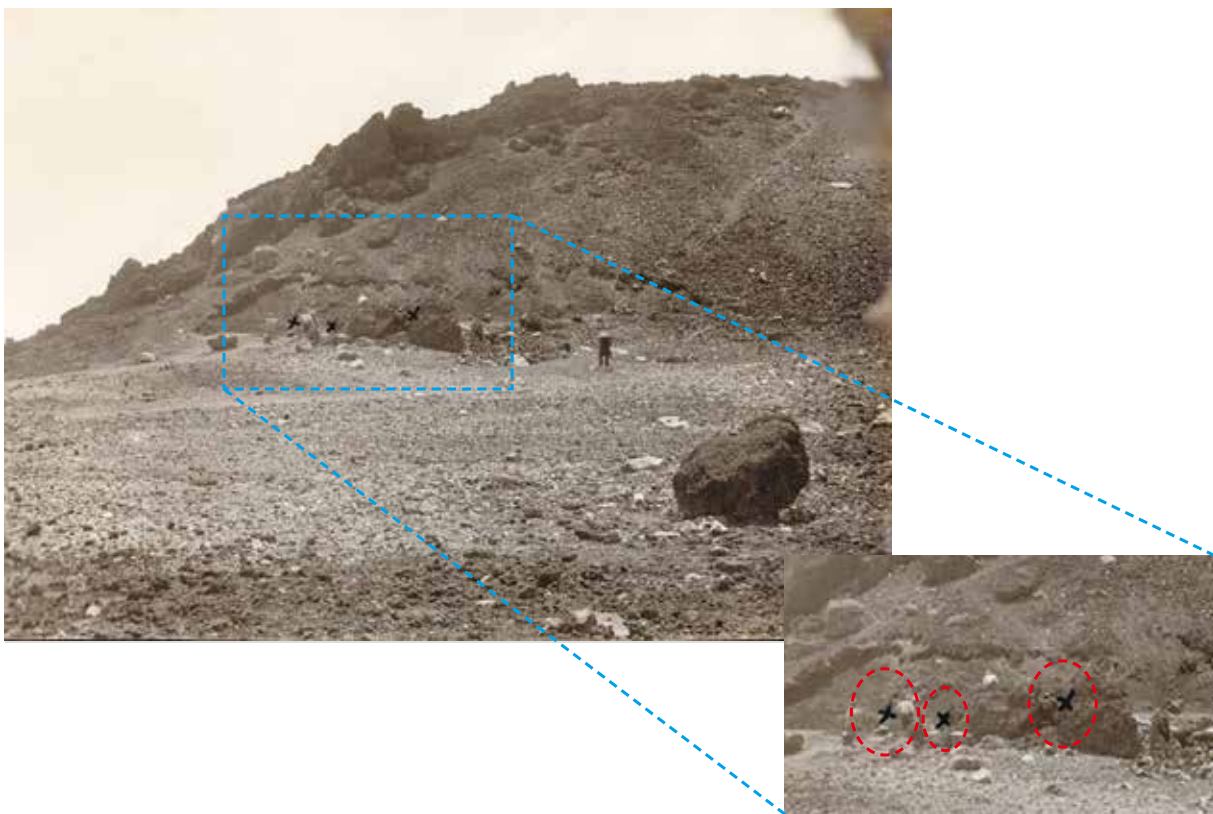


写真 5-8 発見時の三島ヶ岳経塚周辺（浅間大社蔵）
遺物出土位置を示す×印の箇所を右下に拡大して赤で囲った。

八月一日に発見された経巻はほとんど朱書経で、転石でつぶれた大型経筒内にあった。通常経塚では経典を納めた経筒は外容器に納められているが、ここでは外容器に納められていない点が特異である。

この経典であるが、判明しているものだけで『大方等大集経』『仏本行集経』『南海寄帰内法伝』（写真5-9）『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（写真5-10）『弘明集』などがある。また「十七日書了 末代聖人 □亮」と書かれた経典断片が出土したという。なお浅間大社では三島ヶ岳から出土したと伝える『妙法蓮華経』『無量義経』を所蔵しているが、昭和五年の記録には報告されていないものである。

八月一日に発見された経筒三点のうち、経典が入っていた大型経筒について、発見者の佐野は直径二九cm弱、足立は底板の径を二・八二cm、厚さは一・五mmとした。佐野は経筒内に二四cm程度の経巻を二段積みしていたと推定し、経筒の高さは約五一・五〜五四・五cmと推定するが、これは国内出土の経筒でも最大級と考えられる。なお、足立は大型経筒底板外面に墨書で外周に幾つもかさね書きした間から承久の文字痕を発見したという。しかし、経筒に墨書がなされていたという例は、国内の経塚での類例が無く、この三島ヶ岳経塚の大型経筒は後代に人の目に触れる機会があり、墨書きを追記した可能性も想起させる。

昭和五年出土遺物ではないが、東京国立博物館では経塚付近で表面採集された土器片を所蔵している。平成三年（一九九一）に静岡県史編さん事業に伴う経塚資料調査の際に、高台置付に剝殻痕が観察される山茶碗の破片資料が確認された。胎土などの特徴から一二〜一三世紀の東遠江産の山茶碗と推定される。経筒外容器の蓋として山茶碗を利用した例があり、この山頂出土の山茶碗もその可能性があろう。

以上、三島ヶ岳経塚について整理すると、まず木柵に納められた経軸が大量に出土した点、経筒に納められた複数の経典が出土した点、

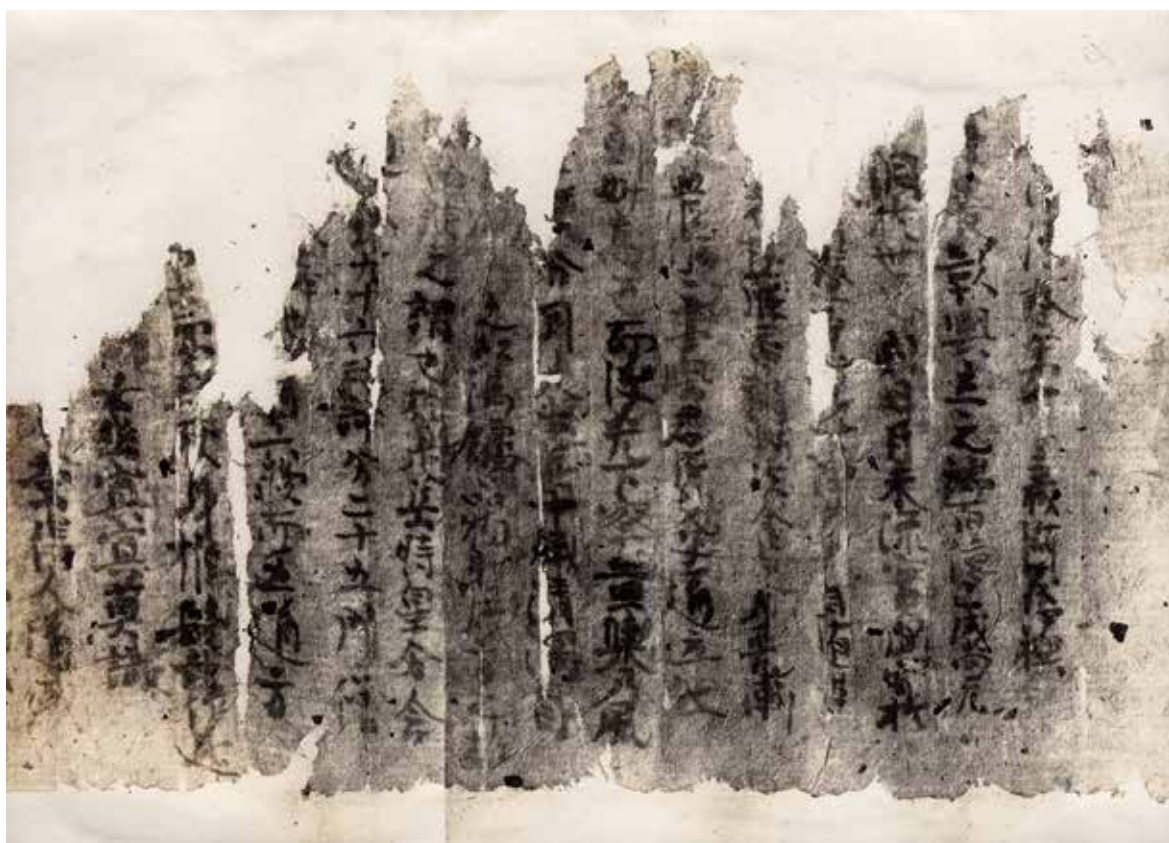


写真 5-9 『南海寄帰内法伝』（浅間大社蔵）

浅間大社には昭和五年の記録にない三島ヶ岳出土と伝わる『妙法蓮華経』『無量義経』が保管されている点、付近で山茶碗が出土した点、以上の点から三島ヶ岳経塚は経典埋納が複数回あった可能性がまず指摘できる。また、国内の経塚で埋納経典名が明らかになっている経塚のほとんどが『妙法蓮華経』を埋納している点から、昭和五年発見の『大方等大集経』『仏本行集経』『南海寄帰内法伝』『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』などは末代が埋納した一切経の一部と考えられる。しかも末代理納経と考えられる経巻が木槲からではなく、経筒から出土したという点から、埋納経の大型経筒への再整理が行われた可能性を有している。

末代上人について

この富士山頂への一切経埋納以前の末代に係る伝承が、相模国金沢称名寺旧蔵『浅間大菩薩縁起』に認められる。末代は「当国所生の人なり。垂髪すいはつの当初より、成人の比くらに至るまで、伊豆走湯山そうとうざんに常住し」とある。彼は駿河国出身で、国内指折りの靈験所として詠われた伊豆走湯山（現熱海市の伊豆山神社）で、幼少時から修行していたという。末代は元々「有鑑ゆうかん」と名乗り、富士山に登頂したという。

『浅間大菩薩縁起』によると、天承二年（一一三二）閏四月一九日に有鑑は富士山へ登頂し、金時上人きんときから日代上人にちだいにんまでの登頂者が納めた金泥経きんじでいぎょうや関伽具あかぐなどを見つけたとある。翌年の長承元年（一一三三）四月一九日に登頂・下山し、往生寺おうじょうじでの夢の中で童子たちどうじ（三宮・悪王子あくおうじ・釵御子せんのみこ）と遭遇し、「汝なれ（有鑑）をば、末代上人と名づけん」と告げられた。これにより有鑑は末代と称したとされる。なお、末代はこの登頂の際に、日代上人が経典を奉納した岩窟がんくつに「関伽の器・鈴・独鈷どくこ・一尺釵いっしやくせん・二柄・金二両」を奉納し、同年六月一九日にも登頂し、「釵一柄・金一両」を奉納したという。また、末代は翌年の四月五日にも

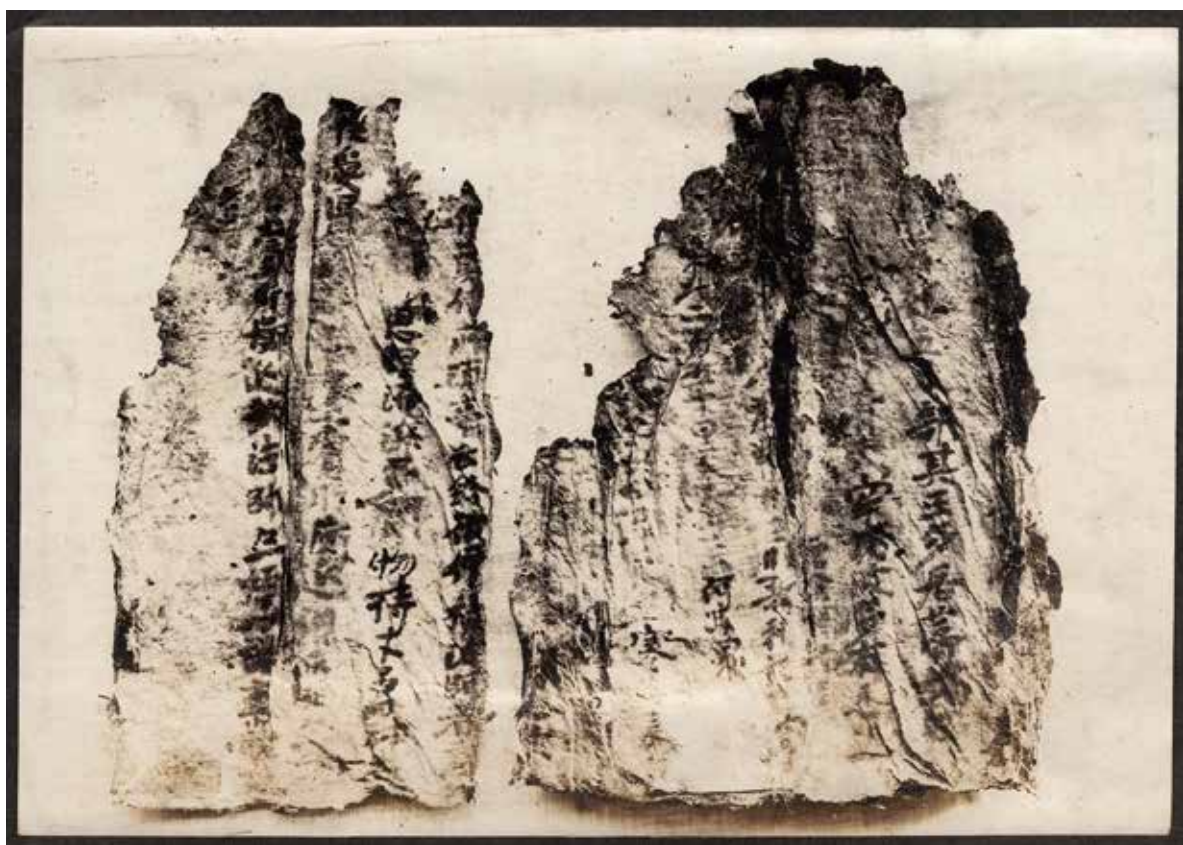


写真 5-10 『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（浅間大社蔵）

登頂し、如法經一部十卷を埋納したという。その際、不動明王三尊がある御正躰（鏡像または鏡面に仏や神の姿を彫り込んだ鏡）を日代上人の岩窟に奉納した。その御正躰には「走湯山の住僧末代上人、生年二十九、浅間大菩薩の示現を蒙りて、当峯に攀ること四ヶ度」と記されていたという。「生年二十九」の記載から、末代は長治三年（一一〇六）ごろの生まれとなる。

白山と末代上人

末代は後述する『本朝世紀』久安五年（一一四九）四月一六日条の記載から、三島ヶ岳経塚造営以前に白山で修行していたと考えられる。白山は石川県・岐阜県・富山県・福井県にまたがる山である。白山は富士山と同様、活火山で山頂には火口が認められる。標高は二七〇二mを測る（写真5-11）。この山の宗教的な開山は泰澄上人によるものとされ、養老元年（七一一）の事と言い伝えられる。白山には越前国や加賀国、美濃国などからの登山道が開かれ、加賀国一宮に白山比咩神社があり、白山比咩大神を祭神とする。



写真 5-11 白山（石川県観光連盟提供）



図 5-2 末代上人関連地図（地理院地図を加工して作成）

長寛元年（一一六三）ごろの成立と推定される『白山之記』に次のような記述がある。「加賀の国石川郡味智の郷に一つの名山あり。白山と号す。其の山頂を禪定と名づく。有徳の大明神住す。即ち正一位白山妙理大菩薩と号す。その本地は十一面観自在菩薩なり。一間一面の宝殿を建立して、五尺の金銅の像を安置す。殿の前に一尺八寸の鰐口を繫けたり（末代聖人の請に依り、禪頂法皇の御願なり）。又長さ一丈の錫杖を立てたり（同じ請、同じ御願なり）。」

白山の三峰のうち、主峰にあたる御前峰の宝殿に末代上人の請願と禪頂法皇（鳥羽法皇）の御願により、鰐口と錫杖が奉納されたとある。また、白山三峰の大汝峯と別山の宝殿に錫杖が末代により奉納されたとある。

京都における末代上人

駿河国出身で、伊豆走湯山にて修行し、富士山や白山にて修行を行っていた末代が、富士山頂に納める一切経の一部を都で写経するくんだり『本朝世紀』に記録されている。

『本朝世紀』第三五、久安五年四月一六日条に、大般若経書写に参加する人々のにぎわいが描写されている。この大般若経書写は「富士上人末代」によるもので、彼は富士山に数百度登頂して山頂に大日寺を建立したこと、また越前国白山の龍池の水を酌んだとして、山岳修行者であることを記している。彼は関東の人々に一切経書写を勧め、鳥羽法皇に清浄な写経用紙六百枚を献上した。彼は法皇と結縁して、人々に大般若経の書写をさせている。人々は、末代を天喜年中に白山で活躍した「日泰上人」の生まれ変わりと信じたとも記している。

四月二六日条には、鳥羽法皇・皇后宮（美福門院得子）が、白川泉殿（白河南殿）の裏に建てられた仮屋で、大般若経書写の「懺法」（仏教儀式の一種）を行ったとある。また法皇は、同日申刻に二条仏頂堂



写真 5-12 白河（鴨川から東の地域。得長寿院・白川泉殿跡地）を西側から

にて般若心経と尊勝陀羅尼の写経に係る懺法を行った。

五月二日、鳥羽法皇は二条仏頂堂での写経（末代が献上した用紙写経を用いた）を終えた。

五月三日、鳥羽法皇から懺法に従事した得長寿院からの供僧二人に布施を賜った。

五月一三日巳刻に権律師の仲胤を導師として、発願の儀式が執り行われた。この際に藤原茂明草案の『鳥羽天皇写大般若経発願文』が奉読された。発願文には末代が「願書如法一切経。奉埋靈岳。旁導結縁諸衆生。令殖善根」（意訳：願わくは、正しき法のもとに写されたお経を靈験あらたかな山に埋め、世の人々すべてと縁を結んで、善きことをおこなう。）を志し、最後に鳥羽法皇が「預弥陀之迎撰。三公會之初。值慈尊之出生」（意訳：阿弥陀仏とお目にかかり、初めての弥勒仏の説法を聞きたいものだ。）を願うと記されている。また、この儀式のために、宮内大輔藤原定信が作成した人名帳（大般若経書写に関わった人たちが）が用意された。未刻には、東山七条末の大宰大貳の藤原清隆の堂で、書写を終えた大般若経に係る十種供養が行われ、経の書写に結縁した人々が多く集まった。ここには院別当因幡守藤原信輔や判官代式部少輔藤原範兼らも参列、供養が終了し、末代に書写された経典が渡された。

『本朝世紀』における末代の記事は以上である。まず埋納された経典は、その一部が都で書写されたことを示している。そして当時権力の中核にあった鳥羽法皇と皇后宮、法皇側近が写経に関与し、その舞台が政治の中心地「白河」の地であったことは特筆すべき点である。『本朝世紀』に見る白川泉殿は洛東白河の地に造営された御所で、白河南殿（写真5-13）の別称である。白河南殿の東側には平清盛の父、平忠盛が鳥羽院のために造営した得長寿院や、白河泉殿南側にあったと推定される二条仏頂堂（右衛門督藤原家成の造進）など、白河の地

に関わるものである。なお、大般若経の十種供養のための施設として、東山にあった大宰大貳の藤原清隆の堂が使用されている。

一連の大般若経写経は、周到な準備がなされていたと考えられ、まして白河泉殿裏に仮屋が設営されていた点で、鳥羽法皇と末代との関係が特別なものであることが想像できる。

この富士山頂の三島ヶ岳経塚造営以降の末代の記録は判然としないが、一山岳宗教者が当時の権力中枢との強い結び付きを駆使して、富士山にその験を残したものである。これは後の世に富士山の神聖性をさらに付加するものであったと評価されよう。



写真 5-13 白河南殿跡（白川泉殿跡）石碑図

第三節 富士山縁起と赫夜姫

縁起資料と富士山縁起

縁起という言葉には、「社寺、仏像、宝物などの由来。または靈験などの伝説。またそれを記した文書」（『日本国語大辞典』）という意味がある。具体的には、寺院の場合は造像記・開眼記・荘嚴記・建造再建の由来記・仏徳の贊嘆・功德・靈驗記・經典の内容を歴を説くもの・住僧伝・一代記・勸進記など、神社の場合は祭神の示現・神格・神事の由来・祭事の奇瑞・社殿の開創・祭神の鎮座記・祝詞や祭文の内容を歴を説くもの・社家と神社との因由を述べたもの・氏子の奇縁伝承を集めたものなどがあげられる（桜井一九七五）。

これらは学術的に寺社縁起と呼ばれているが、その一類型として富士山に関する縁起も制作されてきた。いわゆる富士山縁起と呼ばれるものである。富士山および富士山信仰の寺社の由来や伝説、物語などを記した縁起書を総称したもので、必ずしも全ての作品に富士山縁起という名称が付けられている訳ではない。また、制作された時代や地域によって、同じ名称が付けられていても内容に違いがある場合がある。例えば、市内村山地区を中心に勢力をもっていた修験道本山派に所属する富士山興法寺の村山三坊（大鏡坊・辻之坊・池西坊）に伝えられてきた系統のもの、かつて富士郡の下方（現富士市域）に点在する五社（富知六所浅間神社・滝川神社・今宮浅間神社・日吉浅間神社・入山瀬浅間神社）を管理する東泉院に伝えられてきた系統のもの、また市内宮町の富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）に伝えられてきた系統のもの、静岡市葵区宮ヶ崎町の静岡浅間神社に伝えられてきた系統のものなど、さまざまな内容をもった諸本が伝えられている。

系統	資料名	成立年代	著者・書写者	備考
① 富士門流	当家間書	文明5年(1473)6月17日書写		妙本寺蔵
② 東泉院	富士山大縁起	永禄3年(1560)11月書写	頼恵(編)	富士山かぐや姫ミュージアム蔵
③ 浅間大社(公文富士家)	富士山大縁起本社末社之次第	天正20年(1592)2月17日書写	前永平保寿現住之源凜乎写之	個人蔵、前欠
④ 浅間大社(公文富士家)	富士山大宮縁起本社末社之次第			個人蔵、後半部省略
⑤ 浅間大社(公文富士家)	富士大縁起			個人蔵、『浅間文書纂』所収
⑥ 村山(池西坊)	富士山縁起	近世初期か	諄栄	『修験道史料集』17
⑦ 浅間大社(林家伝来内閣文庫本)	富士山縁起状			『神道大系』神社編16
⑧ 浅間大社(公文富士家)	富士山縁起状			個人蔵
⑨ 静岡浅間神社	富士縁起			『本朝神社考』(林羅山)抄出本
⑩ 浅間大社(公文富士家)	富士山縁起	慶長11年(1606)9月17日書写		個人蔵
⑪ 東泉院	富士山大縁起	元禄10年(1697)書写	円成(写)	富士山かぐや姫ミュージアム蔵
⑫ 村山	富士山縁起	正徳3年(1713)刊本	池西坊行存(撰)	『むろまち』第4集所収
⑬ 東泉院	富士山縁起之状	正徳4年(1714)以前書写	円成(写)	富士山かぐや姫ミュージアム蔵
⑭ 東泉院	富士山縁起	正徳4年(1714)以前書写	円成(写)	富士山かぐや姫ミュージアム蔵

表5-2 富士山縁起一覧（本書関連のものを抜粋）

富士山縁起の諸本はどのような内容で構成されているのか、中世に制作されたものから整理すると、次の八つを抽出できる（西岡二〇〇三）。

- (1) 富士山出現
- (2) 聖徳太子登山説話
- (3) 役行者登山説話
- (4) 古代の富士登山者
- (5) 赫夜姫伝説
- (6) 末代上人の富士登山
- (7) 富士山の階層
- (8) 新山・今山・愛鷹山

富士山の祭神

仏や菩薩が人々を救済するために、仮に神の姿として現れるという本地垂迹説が浸透する神仏習合していた前近代の社会において、富士山内に祀られていた複数の神々には、それぞれに仏・菩薩が比定されている。こうした中で、古代より浅間大神として祀られていた富士山の祭神は、中世には大日如来が本体であり、浅間大菩薩という神様として記されることになっている。この浅間大菩薩は、女性の姿をした神様として捉えられていたようである。鎌倉時代末期には成立していたと言われる『地藏菩薩靈驗記』という説話集の中に、末代上人の話が登場する。そこで末代は、富士山の祭神である浅間大菩薩の本体は金剛毘盧舎那（大日如来）であるはずだから男神かと思うのであるが、夢中に女神の姿で現れたとしている。

また、今川貞世（了俊）が応永九年（一四〇二）に著した『難太平記』に、「富士浅間宮」神託の話が記されている。貞世の父、今川範国が笠験（のぼり旗の紋章）に赤鳥櫛の紋を神託により授けられたとするものである。この笠験を使用した貞世の夢中にたびたび女性の姿で馬にまたがる神の姿が現われ、戦勝をもたらしていたとする（大高 二〇二二）。さらには、今川範政が永享四年（一四三二）にまとめた『源氏物語提要』では、浅間大菩薩は赫夜姫であると確

認できる。同書巻二「第十二 絵合」の部分で、絵合の優劣の根拠として赫夜姫は天女であり、富士浅間大菩薩であるという記述を確認することができる（竹谷 二〇〇六）。

こうした事例は、中世の時代にも富士山の祭神は女性の姿であったと認識されていたことにつながる。その姿は近世江戸時代以後に広く定着していく木花開耶姫命を祭神とみなす前提となったといえるが、中世において富士山の祭神である浅間大菩薩は、赫夜姫と結びつけて認識されていた。このことは、今川範政の『源氏物語提要』よりも前に、富士山縁起の諸本の中で確認できる。富士山縁起の中で赫夜姫は、富士山へ登っていき、そこで浅間大菩薩という祭神になる。こうした物語は、鎌倉時代末にさかのぼると指摘されている称名寺（神奈川県横浜市）伝来「富士縁起（仮称）」にも登場している（神奈川県立金沢文庫 二〇〇三）。この縁起は断簡だが、鎌倉時代末期から南北朝初期にかけて多くの神道書を書写した真言律宗の極楽寺（神奈川県鎌倉市）の僧、全海の書写である。前・後を欠いており、その全貌を確認することはできないが、赫夜姫の物語が引用されている。

富士山縁起の赫夜姫の物語

富士山縁起の諸本に登場する赫夜姫の物語について、その概要を富士郡の下方五社別当をつとめた東泉院に伝来した『富士山大縁起』元禄一〇年（一六九七）書写本（表5-12⑩、写真5-14）から、関連部分を意識した内容で紹介したい。

富士山の麓「乗馬の里」に、箕づくりをして生活する老夫婦がおり、翁は鷹を愛し、姫は犬を飼っていた。ある時竹の中から赫夜姫を発見し、姫は美しい女人へと成長した。そんな折に時の帝は全国に勅使を派遣して美し

い女性を探させていたが、この地方に下向していた勅使が老夫婦の家に宿をとった。するとその夜、宿所はまばゆい光に包まれ、それを怪しんだ勅使が翁に問うたところ、光を放っていたのは赫夜姫であった（「赫」という字は輝くという意味）。赫夜姫は夜にもまばゆいばかりの神々しい光を放っていたのである。勅使は赫夜姫のことを帝に報告し、赫夜姫は有力な候補となるが、姫は勅命を断って富士山へと登り姿を消す。

赫夜姫は富士山の祭神、浅間大菩薩を名乗り、翁は愛鷹山で愛鷹明神に、姫は今山で犬飼明神となった。

この東泉院旧蔵『富士山大縁起』以外にも、『富士山縁起』村山三坊池西坊本（表5-2⑥）などでも、富士山へと登ろうとする赫夜姫と、それを追いかけてきた諸人とは富士山の中宮で対面している。ここで養父である翁と別れの歌を交換するが、その後に赫夜姫が富士山釈迦岳南東の大穴へ入ってしまった後は、「それ依り以来、人この山へ登る」となったとある。こうした場面の設定は、容易に足を踏み入れることができなかつた神仏のおわす霊山、富士山への一般民衆の入山を祭神である赫夜姫が許可したという意味づけを与えている一文である。そんな中でも中宮という場所では、「其上より女人登らずなり」と記されており、女人禁制の意味づけも確かに与えられている。このことは、信仰登山が活発化してきた中世後期の室町時代以降の状況を背景に、参詣者を誘うため、かつ一般民衆に対して富士山信仰を解き語ることを目的に、縁起が制作されていたことを読み解くことができよう。

東泉院旧蔵『富士山大縁起』永禄三年（一五六〇）書写本（表5-2②）、写真5-15）では、下方五社の由緒や祭礼・祭神などを記した「五社記」



写真 5-14 富士山大縁起（富士山かぐや姫ミュージアム蔵 表 5-2 ⑪）

と題された部分を含んでいるが、滝川神社（新宮）のところに「愛鷹赫夜妃誕生之処」、今宮浅間神社のところに「犬飼神」と注記されている。つまり、滝川神社は赫夜姫誕生の地として祭神に翁が祀られ、今宮浅間神社は祭神として姫が祀られていたことがわかる。また、「五社記」に「惣社」と注記されている富知六所浅間神社では、赫夜姫を祭神としていたようである。明和四年（一七六七）に東泉院が寺社奉行へ提出した由緒書でも、父宮（滝川神社）・母宮（今宮浅間神社）・六所宮（富知六所浅間神社）は「赫夜姫御誕生之地」として、それぞれ翁・姫・赫夜姫が祀られるとある（富士市立博物館 二〇一〇）。

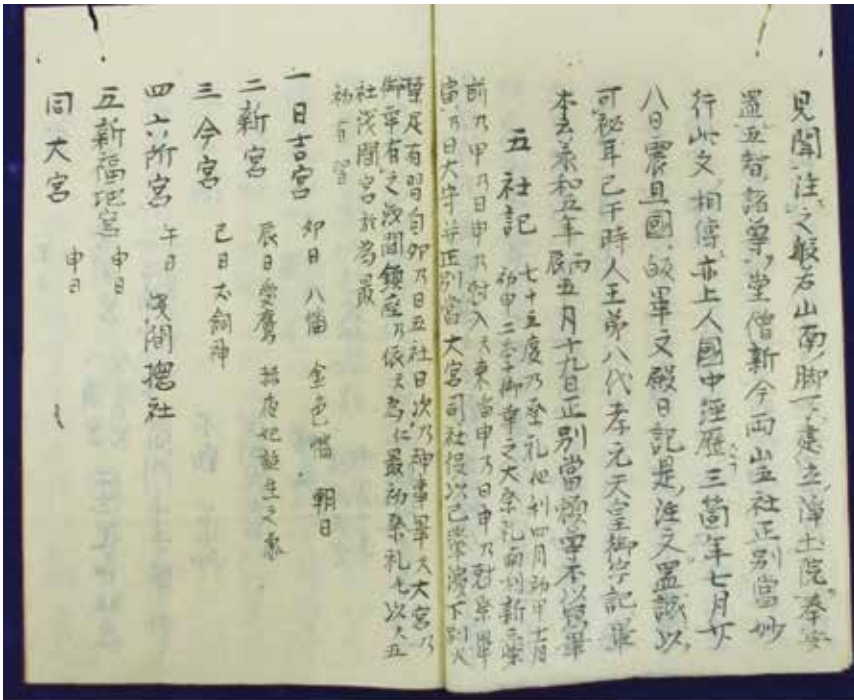


写真 5-15 富士山大縁起
（富士山かぐや姫ミュージアム蔵 表 5-2 ②）

『当家間書』と富士郡上野郷の井出氏

千葉県鋸南町の妙本寺に『当家間書』と題された史料が伝えられている。富士山縁起の諸本の一つで、赫夜姫の物語が二七〜三二丁に記されている（表5-2①、写真5-16〜18）。当時すでに周知の物語であった赫夜姫の物語をもとに、富士山に本門の戒壇を建立する意義を説くという構図をとっている（池田 二〇〇五、大黒 二〇〇七）。まずは『当家間書』に登場する赫夜姫関連部分を意識した内容で紹介したい。

天竺から般若山が唐土へ、さらには日本へと飛び渡り、孝靈天皇の御代に富士郡に落ち着き富士山となった。般若山には一組の老夫婦が居着いており、ササメの竹を取り、蓑をつくって売って暮らしていた。老人は「佐竹の翁」と呼ばれ、もとは天竺の人で何を話しても人々には伝わらず、唐土の人が通訳に入って話を伝えた。

ある時、翁は仕事で竹を割っていると、中に小さい豆粒のような虫がおり、良く見ると人の形をしていた。その子を養い育てると一五日で美しい娘に成長した。娘はその身体から神々しく光を放ったので「カガヤク姫」（カグヤ姫）といわれた。その光は闇夜を照らし、翁の住む家は夜も昼のように明るかった。そんな折、桓武天皇の命で日本国中から世の中に二人としない美人を探す命を受けた將軍・坂上田村麻呂はこの姫の噂を聞き、翁のもとを訪れた。姫と対面した田村麻呂はすぐ都に戻り天皇に報告すると、天皇は喜び富士に迎えをよこした。翁は姫にそのことを伝えると、姫は「容易には叶わないことです」と言い残し、富士山の中腹に鏡を置いて、その身

公文富士家伝来の富士山縁起

今回の市史編さん事業の調査で、新出の富士山縁起を確認した。表5-2に「浅間大社（公文富士家）」系統として紹介しているものである。

本書では、『富士山大縁起本社末社之次第』について紹介したい（表5-2③、写真5-19）。奥書の部分に「維時天正廿年壬辰二月十七日戊申日前永平保寿現住之源凜乎写之」とあるが、以前に曹洞宗本山の永平寺におり、当時は保寿寺（富士市伝法）僧であった之源凜乎が書写したものと記されている。保寿寺は文龜三年（一五〇三）八月に曹洞宗に改宗し、天正一四年（一五八六）に之源（芝源）凜乎が第二世住職になったとされる（駿河郷土史研究会 一九八九）。奥書には、さらにこの縁起のほか一一巻があり、天正九年（一五八一）全てを之源が書写し、大宮寺の土雲に渡したとある。大宮寺とは浅間大社の別当宝幢院のことであろうか。

また、この縁起は静岡浅間神社の新宮神主と思われる「府中新宮殿」の所望もあって書写し、渡されている。末尾にこの縁起は東泉院にもあるとしているが、之源はおそらく保寿寺でこれらの縁起を相伝していたのではなく、達筆さかわれて縁起の書写に関わっていたのではないだろうか。

駿河国の富士川より東側の「河東」と呼ばれた地域は、天文六年（一五三七）以降に今川氏と北条氏が支配権をめぐり争った「河東一乱」（本編第四章第二節）の影響をかなり受けていたようである。地域の神社はかなり荒廃したようで、富士山信仰に関わる仏神事は、断絶を余儀なくされ危機的状况にあっらしい。富士山縁起は富士山信仰をめぐる宗教的な世界観を文字にしてあらわした貴重なテクストであるが、「河東一乱」終結後の復興の過程において、勧進活動の必須用具に使われたために、五社別当東泉院や浅間大社、また静岡浅間神社の社家にも秘伝として共有されていた。



写真 5-19 富士山大縁起本社末社之次第（奥書部分）（公文富士家文書、個人蔵 表 5-2 ③）

第四節 浅間大菩薩と富士の人穴信仰

真名本『曾我物語』の成立と浅間大菩薩

真名本『曾我物語』は、『吾妻鏡』に記録された曾我兄弟の仇討ちの記事とその源を同じくしながら、東国（都から東の諸国。特に富士山を望む東海道から関東地方）で成立した軍記物語である。物語の本文が全て漢字で表記される特殊な様式を持つため、真名本といい、「ヲコト点」と呼ばれる訓点を施して読み下す方法で書かれている。

全一〇巻からなる各巻の冒頭には、「報恩合戦謝徳闘諍集」の副題がある（写真5-20①）。それは、曾我兄弟の仇討ちの物語が、実は中世仏教の基盤をなす「報恩謝徳」の思想に重なるものであるという、物語を貫く主題を表わすための宗教的な題目であった。

その宗教性は、父の仇である工藤祐経を討つために富士の狩場へ赴く曾我兄弟が、富士にまつわる枝折山伝承と赫夜姫伝承を互いに語り合った上で「富士山は仙人の住まう山であり、その山神に結縁する自分たち兄弟の戦いは、報恩の合戦であり謝徳の闘諍である故に、山神も納受し、富士郡の御霊神と現れることが出来るであろう」と説くところに、端的にかたどられている（巻七）。そこに物語られる枝折山伝承と赫夜姫伝承は、「報恩謝徳」の戦いを意義付け、死して浅間大菩薩の客人神と顕れる兄弟の運命を根拠付ける、重要なエピソードであった。そのなかで、浅間大菩薩は、千手観音を本地として、地獄道を司り地獄の苦しみから救ってくれる神であり、仙女である赫夜姫とともに契りを結んだ駿河国の国司が、男女の神として現われていると説かれる（写真5-20②）。

このように、武士による戦と仏教の思想を結びつけるために、真名本『曾我物語』は全編にわたって富士に連なる東国の寺社の縁起

伝承を豊かに取り込み、鎌倉殿（頼朝）の支配の元では単なる私闘として断罪されるしかなかった仇討ちを、富士の神仏の靈験のもとで功德（善行）に逆転させる。その手法や文章は、仏事法会など聴聞の場で教えを説く技である唱導（仏法への信仰を勧める）の役割を踏まえている。この唱導の名手として、鎌倉時代に名声を博したのが、天台宗の安居院澄憲と聖覚の父子である。聖覚の関東下向に伴って、安居院の唱導は東国に伝わり、重んじられていく。真名本『曾我物語』は、伊豆山や箱根山において、そうした安居院の唱導を使いこなす僧侶たちが活躍する宗教的環境に根ざして形成された唱導文学でもあった。

それゆえに、真名本『曾我物語』は鎌倉時代後期にさかのぼる成立と考えられるものの、当時の写本は現存していない。天文一五年（一五四六）に日向国で日助によって写され、安房（千葉県）の妙本寺貫主である日我の元へもたらされた妙本寺本が最古の写本であり、次いで天文二三年（一五五四）に日義によって書写された本門寺本（重須本）が、北山本門寺に伝えられている。妙本寺本を書写した日助は、奥書に「四位公」という稚児名も名乗っており、僧侶となるための学びの環境の中で写し伝えられたものだろう。

本門寺本も、より多くの訓点が施されていることから、これを訓読する学習とあわせて継承された消息がうかがえる。巻七の裏表紙見返しには、赫夜姫の和歌「山ハフジ煙モフジノ煙ニテ シラズバ イカニアヤシカラマシ」と、曾我兄弟にまつわる連歌「曾我兄弟はほとけにぞなる 蓮葉にかわづの子どものぼりゐて」が書き入れられている。その書き付けからは、本書が富士浅間大菩薩の信仰伝承の記憶を伝えるために重要な役割を担って書写されたことが察せら

れる。また、妙本寺の学僧日我が自身の編んだ辞書『いろは字』に『曾我物語』を参照しているように、『曾我物語』は、日蓮宗富士門流の学問の一角において、重要な位置を占めていたことが知られる。その学問の基盤には、東国に広く所在していた天台の談義所とよばれる学問寺の宗派を越えたつながりがあった。

『曾我物語』の写本には、真名本のほかに、真名本を訓読した真名本訓読本や、都で編集されて仮名で表記された仮名本の系統がある。兵庫県の天台寺院である太山寺に伝わる仮名本には、天文八年（二五三九）の奥書があり、全ての伝本のなかで最も古い写本である。ただし、真名本訓読本や仮名本は、真名本の肝心というべき富士山の縁起伝承が唱導の本文とともに省かれている点、真名本とは明らかに質を異にした物語となっている。

鎌倉時代に東国で語り出された曾我兄弟の物語が、盲目の語り部である瞽女や琵琶法師、絵解きなどの芸能者たちによって都に伝えられ、語り物として人気を博していた様子は、『醍醐寺雜記』貞和三年（一三四七）の記事によって知られるが、元亨三年（一二三三）の奥書を有する真光寺本『遊行上人縁起絵』に、富士の麓で鼓を打つ瞽女の姿が描かれていることも注目される（写真5-21）。富士山を指しながら道行く武士の一行は、まるで曾我兄弟とその従者たちを想起させる。それと鼓を打って物語る瞽女を組み合わせて描く趣向は、瞽女による曾我語りの光景を示すかのようである。

曾我兄弟の物語は、室町時代には能や幸若舞など当時流行した中世芸能の主要な演目となり、富士の巻狩り図を中心に屏風絵や絵巻、絵本としても数多く制作され、江戸時代に至るまで社会に広く親しまれた。そのなかで、富士の巻狩り図には欠かせない新田四郎忠常の猪狩りの武勇伝が、富士の人穴を舞台に、曾我語りの一挿話という以上の独特な伝承世界を生み出すことになる。



写真 5-20 真名本『曾我物語』
(妙本寺本、出典：ColBase
<https://colbase.nich.go.jp/>)

②巻七、赫夜姫伝承部分

①巻七、冒頭

電子データ
非公開
(書籍でご覧
いただけます)

電子データ非公開
(書籍でご覧いただけます)

鼓を打つ瞽女
(部分拡大)

写真 5-21 『遊行上人縁起絵』巻二（真光寺蔵、京都国立博物館提供）

『富士の人穴草子』の登場とその縁起世界

同じく『吾妻鏡』に記された二代将軍頼家の命による新田四郎忠常の人穴探検の記事を出発点に、『曾我物語』の外伝というべくして室町時代に成立した物語が、『富士の人穴草子』である。

『吾妻鏡』（建仁三年（一一二〇）三月六日条）によれば、人穴へ入った新田一行は、大河に行く手を阻まれ、神異に遭い、郎党四人がたちまち死んでしまう。新田は、頼家から賜った剣を河に投げ入れることで、命からがら帰ってくる事ができたという。その記事には、「浅間大菩薩の御在所」は誰も見る事が叶わず、このたびの一件は恐るべき事だと語ったという古老の話が添えられている。

あたかも、のちに頼家が失脚し悲惨な最期を迎えることを予告する伏線のように配置されたこの記事を種として、『富士の人穴草子』では、『吾妻鏡』に語られることのなかった、人穴の奥にある「浅間大菩薩」の世界が明かされる。仁田（『吾妻鏡』では新田）の前に、はじめ大蛇の姿で現れた浅間大菩薩は、剣を得て童子の姿に変わり、地獄極楽の世界を案内し、その見聞を草子に書きとどめて仁田に手渡す。時が来るまでは決して語らないようにとの戒めを破り、仁田が頼家に人穴で見聞したことを洗いざらい申し述べた結果、浅間大菩薩から罰が下され、二人共に命を失う顛末となる。

このように、『富士の人穴草子』は、大菩薩との約束を違え秘密を明らかにしてしまったあげく冥罰を蒙るという、因果応報の枠組みをもって浅間大菩薩の世界を語る、宗教的な縁起物語なのである。

『富士の人穴草子』は、室町時代後期、『言継卿記』（大永七年（一一五二）正月二六日条）に「ふしの人穴の物語」とあり、その時点ですでに成立し、都にもたらされていたことが知られる。それは、富士山が当時の政治情勢の中で都からも注目されるなかで誕生した、新たな物語であった。

富士の人穴をめぐる信仰伝承から見る『人穴の草子』の特色は、新田が訪れた富士浅間大菩薩の御在所において、法華経信仰が色濃くあらわれていることである。御在所のなかの「光堂」や六道めぐりを経て、阿弥陀如来の救いである極楽浄土が説かれるところも重要である。地獄では墮地獄の罪障が繰り返され、東国・西国からの参詣の道者、特に女性が強く意識されている。

加えて注目されるのが、室町初期の仏教説話集『三国伝記』最終話の『富士山事』との関わりである。『三国伝記』において、黒駒に乗って富士山に飛翔した聖徳太子が山頂の靈窟の穴に入り、大蛇と出会う光景は、新田が富士の人穴に入り浅間大菩薩の化身である大蛇と出会う場面と酷似し、『三国伝記』からの影響がうかがえる（小林二〇〇一）。これにより、近江を中心とした天台談義所のネットワークのなかで成立し、東国の伝承を広く取り込んだ『三国伝記』を原型として、『富士の人穴草子』が成立した道筋を想定できる。『三国伝記』の所説は、江戸時代の『富士山縁起』（裾野市土屋家蔵）とも共通しており、確かに富士に根ざした伝承であった。

一方、元禄一〇年（一六九七）の奥書を有する『富士山大縁起』（富士市東泉院旧蔵、本章第三節表5-12①）の末尾には、新田が人穴を通り浅間大菩薩と対面し、地獄の裁きを検分したのは神徳によるものであると説かれ、明らかに『富士の人穴草子』が踏まえられている。室町時代後期の『富士の人穴草子』の成立には、当時の富士山興法寺や富士山本宮浅間大社が富士参詣の道者に六道銭を求めめる際の勧進唱導も関わっていたかもしれない。

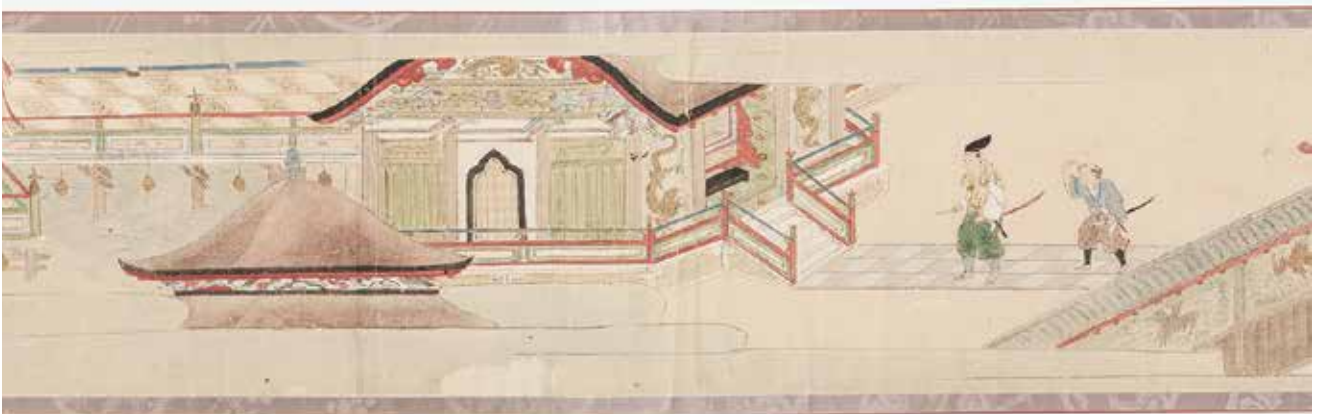
『富士の人穴草子』には、慶長年間（一五九六―一六一五）の写本が残るが、それ以前の古写本は知られていない。江戸時代前期には版本として繰り返し刊行され、近世後期から近代にかけては富士講の盛行と結びついて、非常に多くの写本が残る。そうしたな

かで注目されるのが、上巻だ
けが伝わる絵巻である（田村
二〇二一・二〇二二）。巻末に
「常信」印があり、画中に描
かれる富士山図も含めて、江
戸幕府で将軍の御用絵師を勤
めた木挽町狩野家の祖である
常信（一六三六～一七二三）
本に連なる現存唯一の模本で
ある。人穴の奥で機を織る女
性の描写や、長大な画面を
もって展開される浅間大菩薩
の御在所の場面（写真5-22）
は、『富士の人穴草子』に繰
り上げられる中世の宗教的な
伝承世界の趣きをよく伝えて
いる。

それは、富士講の行者たち
が盛んに聖典として書写した
『富士の人穴草子』の民衆的
な享受とは対照的であり、徳
川將軍の権威を表象する莊嚴
のための絵巻として、中世以
来の富士山の縁起伝承の世界
が再び新たな姿をあらわした
可能性を示唆している。



①富士山の人穴へ向かう仁田四郎と従者。



②浅間大菩薩の御在所である八棟造の御所をめぐる。橋に下げられた黄金の鈴は法華經の音を奏でる。



③大蛇（浅間大菩薩）と対峙する。

写真 5-22 絵巻『富士の人穴草子』（田村正彦氏蔵）紙本著色、縦 27.7cm×横 151.0cm

第五節 富士曼茶羅図の世界

参詣曼茶羅とは何か

全国各地の聖地・靈山を対象に俯瞰的な構図で描き、目的地への参詣路を配して、行き交う人々の姿を多数描いた、学術的に参詣曼茶羅と呼んでいる宗教画の一群が存在する。一六世紀ごろに靈場(寺院・神社)への参詣を目的として作成された宗教的な案内絵図で、応仁の乱後に経済的な基盤を失っていた寺社が外部の第三者に対して行っていた勸進活動かんじんに関わって成立し、各地に四〇カ所以上現存している。また、全ての作品ではないが、その多くの作品が以下の八点の機能的特徴をもっている。

- (1) 大幅の画面に安価な顔料で彩色している。
- (2) 画面に参詣の出発地点を設定し、目的地までの参詣道を配して、そこを行き交う参詣者たちの姿を描いている。
- (3) 寺院・神社の境内とその周辺を俯瞰的に描くが、描かれる図像の内容は作成主体によって意図的に選択されたものである。
- (4) 参詣の作法、名所・旧跡を紹介する聴衆の案内図となっているが、画面に描かれる図像群(堂舎・人物・縁起えんぎ)の絵解きを行う介在者を必要とする。
- (5) 寺社の年中行事や祭礼、門前町の繁栄を描くものがある。
- (6) 寺社に伝わる物語(縁起・靈験譚れいげんたん)を描くものがある。
- (7) 先行する春日や熊野などの神社境内を俯瞰的に描いた垂迹すいじやく曼茶羅の影響を受けるもの、掛幅式の寺社縁起絵の影響を受けるものがある。
- (8) ほとんどが紙本で作成されているが、一部例外的に絹本けんばんで作成されたものがある。

こうした参詣曼茶羅の作品群には、富士山を対象として描いた作品もいくつが存在し、学術的には富士参詣曼茶羅と称される。

一六世紀以降の中世後期から近世初期の期間において、富士山へ登山するためには駿河国側には表口(大宮・村山口登山道)・須山口登山道・須走口登山道、甲斐国側にも吉田口登山道が利用されていたが、富士参詣曼茶羅は全て駿河国側の表口を構図にした作品のみ制作されている。この理由は、この宗教画の展開過程が影響している。参詣曼茶羅は西国二十三所観音霊場のネットワークを背景に、都を中心とした畿内周辺きないから諸国へと広まっていた。表口は、東海道に面した主要な登山道であり、中世に富士山各登山道が開かれていく中で、東海・近畿地方から訪れる参詣者にとっての表玄関という位置にあった。事実、表口を管轄する富士山興法寺(以下、興法寺)(現村山浅間神社、大日堂)の修験者は、東海・近畿地方に自らの活動拠点である旦那場だんなば(道者場)を多く抱えていた。こうした背景から、畿内周辺で流行していた参詣曼茶羅を取り入れ、参詣者の勧誘や勸進活動に使用することになったのではないかと考えられる。

参詣曼茶羅の大きな特徴として、聖地・靈場を巡礼する人々の姿を画面に描きこんでいるという点がある。この作品に描かれた世界観をもとに、現地の様子を案内していた使用者は、画面に描かれた思想や信仰を一般民衆に解き語っていった。語りを受けた人々は、画面に描かれた人物図像に自らを対比させるといった効果を生んでいたのである。こうした行為を「絵解き」と呼んでいる。

本書では富士参詣曼茶羅の作品の中で最も著名で、画面右下隅に狩野元信(一四七七〜一五五九)の壺型朱印が捺されており、一六



写真 5-23 富士曼荼羅図 (浅間大社蔵) けんぼんちやくしよく 絹本著色、縦 180.2cm×横 117.8cm、国指定重要文化財

世紀初〜中ごろに制作された作品と考えられる国指定重要文化財に指定されている富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）所蔵の富士曼荼羅図（写真5・23）に描かれた世界観を「絵解き」することで、中世後期の信仰登山の様相を探っていききたい。

富士曼荼羅図の構図

画面下方には清見寺・駿河湾・三保松原を描き、富士山頂は三峯の形式で描かれ、一種の名所絵的な定型の構図をもっている。富士山の山内に描かれている御堂群は「すやり霞」により分割され、険峻な山体を表現するとともに、下から上に行くほど聖域性が増していく構造となっている。

画面の中心軸には、富士山への参詣者（道者）が垢離を取った浅間大社の湧玉池、修験道本山派の興法寺、登山道の御堂群、富士禅定（山頂）という表口登山道沿いの拠点が位置しており（図5・3）、全体で二三七人の人物図像が登場している。人物図像は性別不詳の子供六人を除いて、男性が二〇九人、女性が二二人である。富士山への信仰登山を目的とする参詣者と、信仰登山を目的としない居住者とに分けられるが、この人物図像には追加されたものが含まれている。

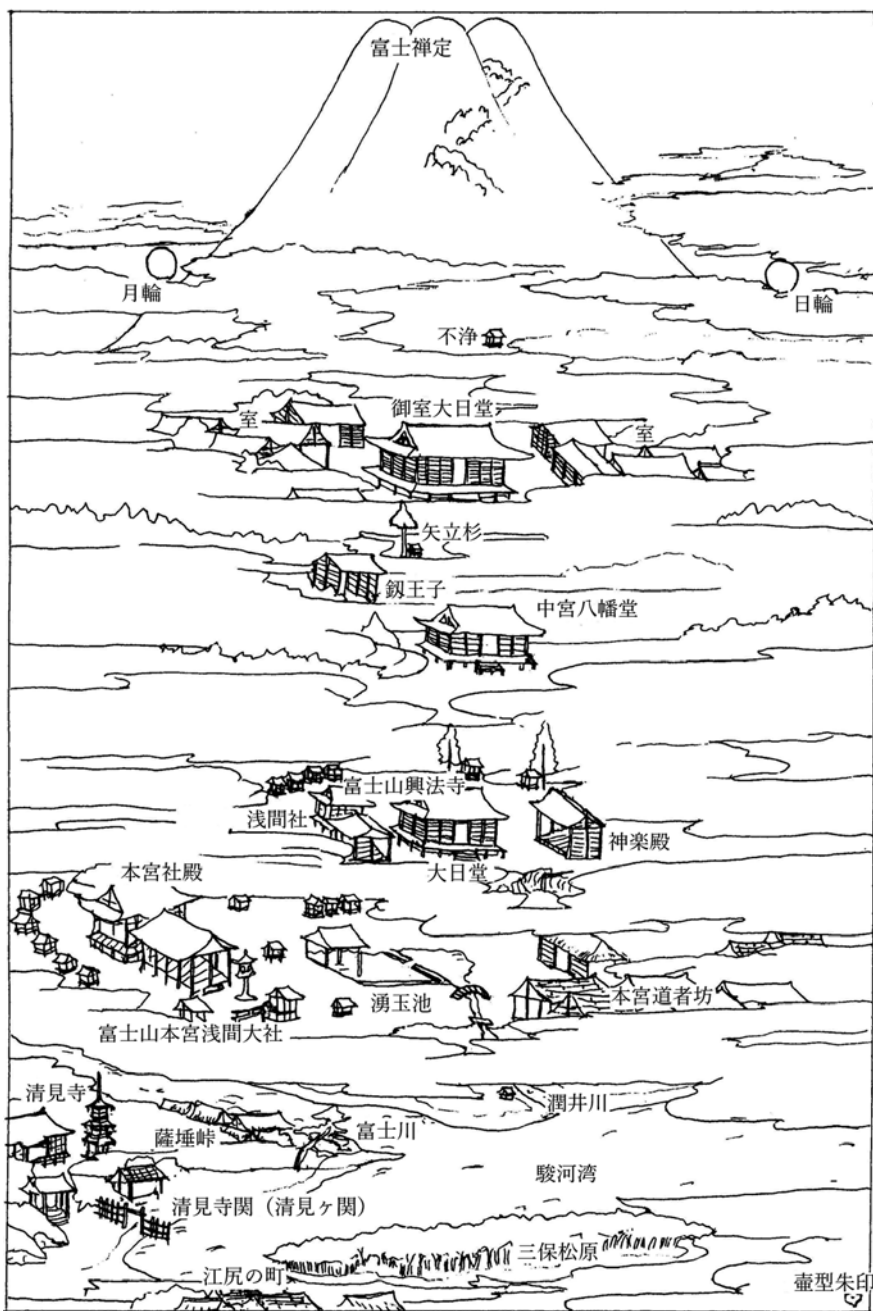


図 5-3 富士曼荼羅図のトレース図

富士曼荼羅図を絵解く（興津宿〜村山口）

この作品を「絵解き」する上で重要となるスタート地点は、画面の左下に設定されている。ここは東海道興津宿の清見ヶ関（清見寺関）（写真5・24）の西側で、東海道を東行する騎乗の人物一人を含んだ計九人の一行が描かれている（写真5・25）。この一行は、スタート地点の表象として、往來のにぎわう東海道を東海・近畿地方から富士山に向かう方向で描かれる。この作品の制作者の視点は、西からの信仰登山を前提として描かれたものと読み解ける。

さらに東海道を進んで、富士川を渡船で右岸から左岸へと渡った参詣者は、田子の浦海岸を潤井川河口付近へ向かう。このルートは、慶長七年（一六〇二）六月以前に主として利用された中世の東海道のルートであるが、潤井川河口付近には垢離を取る三人が描かれている（写真5-26）。

潤井川河口付近で垢離を取った参詣者は、ルートを北西にとり、表口からの信仰登山の拠点の一つ大宮口へと向かう。大宮口には駿河国一宮の浅間大社が存在する。境内の湧玉池で道者が垢離をとっているが、すべて男性を描いている（写真5-27）。湧玉池の下方に騎乗者のいない白馬が描かれるが、白馬の前方に腰から空穂をさげた二人の者がおり、彼らが弓を携帯していることから、この図像は浅間大社の流鏑馬神事を示しているよう（写真5-28）。

大宮口を出発した参詣者は、東北八km程離れた表口のもう一つの拠点、村山口に到着する。ここには興法寺と号す修験者の拠点となる寺院が存在し、衆徒と称す山伏の生活する院坊は、道者の宿坊としても機能していた。この興法寺の衆徒が山頂までの以降の道程を管轄していた。興法寺境内左側の社殿は（村山）浅間神社、中央に本堂となる大日堂、右側に拝殿（神楽殿）が描かれる。拝殿では巫女が舞っているが、隣に座る男性は鼓を打っており、太々神楽の奉納か、祈禱が行われている最中



写真 5-26 潤井川河口の水垢離



写真 5-27 湧玉池の水垢離



写真 5-24 興津宿の清見ヶ関（清見寺関）



写真 5-28 浅間大社の流鏑馬神事



写真 5-25 騎馬による参詣者一行

と思われる。境内の人口滝である龍頭滝では、四人が垢離をとっているが（写真5-29）、右端の白装束を着たまま裸をする者は女性を描いた可能性がある。

富士曼荼羅図を絵解く（村山口〜森林限界）

興法寺以降の山中の御堂群は、中宮八幡堂・劔王子・矢立・御室大日堂と考えられるが、「すやり霞」で別の場所として仕切られたこれらの堂舎画像のうち、中宮八幡堂から劔王子周辺には白装束の女性道者が集中的に描かれており（写真5-30）、これ以降には女性道者は描かれていない。

劔王子周辺に集中して描かれる白装束の女性道者は一〇人いるが、後に何らかの事情で追加された人物画像である。そこからこの作品では、女性の人物画像を追加することで、女性道者の信仰登山の限界地点を明示する意図があったものと読み解ける。当時実際に女性道者が富士山表口に訪れていた背景があり、女性道者を多く表口に誘おうとする意図が働いていたものかも知れない。

続いて、御室大日堂へと至った参詣者は、ここにあつた室で休息をとり、富士山頂の噴火口に鎮座する神仏の世界へと向かうことになる。御室大日堂左方の室に注目すると（写真5-31）、室に入ろうとしている者は白装束ではないが、室から出てきた四人の者は、白装束に身を包み松明を手にしている。つまりは、ここから先は夜行登山を行っていること、御室大日堂以降は全ての参詣者が白装束に身を包むことになっていったことがわかる。また、御室大日堂から先の森林限界付近に、表口で「不浄」と呼ばれていた場所を描いたと思われる箇所がある（写真5-32）。ここでは焚火のそばで座る人物の右脇に箱が置いてあるが、この箱には懐紙（携帯するための和紙）が入っていたのではないだろうか。原徳斎による文政一年



写真 5-31 御室大日堂付近の室



写真 5-29 龍頭滝の水垢離



写真 5-32 「不浄」（森林限界付近）の道者



写真 5-30 劔王子付近の女性道者（白装束）

(二八二八)の信仰登山の記録『富嶽行記』では、山中での排せつの際に神聖な山を汚さないように懐中紙を敷いて用を足したと記されているが(井上 二〇一九)、森林限界周辺は樹木に隠れて排せつ行為が可能となる最後の場所と言えるだろう。「不浄」という場所も排せつ行為が行われることによって付いた名称と考えられ、焚火の前で座る人物は、排せつ行為に対する不浄解除のための潔斎を行っていたものか、あるいは参詣者に懐中紙を配布するための勧進銭を徴収していた可能性が考えられる。

富士曼荼羅図を絵解く(森林限界と富士山頂)

森林限界を越えた参詣者は、松明を手に墨染衣の先達に導かれ、険峻な山体を登っていくと(写真5-33)、ついに目的地である富士禅定(山頂)へと到達する(写真5-34)。山体の向かって右側に日輪、左側に月輪を配すことで、昼の時間と夜の時間をつかさどり、聖地の永続性が表現されている。富士山の山容についても左右に幅を広げるといふ描き直しが行われている。

また、三峯の形式で表現されており、それぞれに三尊が鎮座している。虚空には散花が舞い、浄土の世界が表現されている。三尊は、図様から右より大日如来・阿弥陀如来・薬師如来に比定できよう。本来であれば、山頂の内院(噴火口)に鎮座する中心仏は大日如来であるので、真ん中に大日如来を配してもいいように思うが、実際はそうなっていない。この配置に答えを導き出すのであれば、右側の峯から山頂へと至るルートで描かれる表口を信仰登山していくと、その頂上には大日堂が祀られていた。その反対側の北口を信仰登山していくと、その頂上には薬師堂が祀られていた。この関係性から、右側の峯(表口)には大日如来、反対の左側の峯(北口)には薬師如来、そして浄土の世界として表現される山頂中央の峯には

阿弥陀如来が配されたのではないだろうか。

当時の人々にとって、阿弥陀如来の姿を山頂で拝することが叶うのであれば、それは極楽浄土へと導かれる「御来迎」の場面に遭遇することでもあった。自然現象としてのブロッケン現象を阿弥陀如来の来迎として捉えたこともあったであろう。このことが現在も、山頂で朝日を拝す御来光の習俗に引き継がれているのである。

また、当時実際に山頂へ信仰登山を果たした参詣者は、噴火口に鎮座する中心仏の大日如来に散銭を捧げ祈願をしているが、周囲の八葉の峰々に鎮座する八体の仏にも祈願を行ってまわったものと考えられる。この行為(御八葉廻り)が、御鉢廻りの習俗として引き継がれている。



写真 5-33 険峻な山体を登る道者と先達



写真 5-34 富士山頂の三尊

第六節 富士山頂の信仰世界

八葉九尊

「富士曼荼羅図」(本章第五節写真5-23)の山頂部分には、三峰のそれぞれに三体の仏の姿があり、周囲には散華が描かれている。本作品は一六世紀に成立したとされ、当時、富士山頂が仏(神仏)の世界と考えられていたことがうかがえる。文永六年(一一六九)成立の『万葉集註釈』に「ただきに八葉の嶺あり」と記され、中世には仏教の「八葉蓮華」を富士山頂に当てはめる思想があったことがわかる。江戸時代のものになるが、正福寺(山梨県富士吉田市)には、富士山の風景とともに中央の大日如来を八体の仏が囲む「富士山八葉九尊図」(写真5-35)が伝わっている。また、同寺には山麓から山頂までの景観を描く「八葉九尊図」(写真5-36)もあり、山頂部分には「けんのみね」(剣ヶ峰)などの地名とともに薬師・観音・勢至・地藏・両部大日・阿弥陀・文殊・釈迦・普賢の仏が記されている。同じく江戸時代の資料になるが、村山の池西坊による「蓮嶽真形図」(写真5-37)には、写実的な山頂風景の上部に「一岳 地藏菩薩、二岳 阿弥陀、三岳 大悲観音、四岳 釈迦、五岳 弥勒、六岳 薬師裏口本尊、七岳 文殊、八岳 宝勝如来、中央 大日如来」と九体の仏の名が記され、風景画中の峰にはそれぞれ番号が付してある。中央にある火口には大日如来、それを取り囲む八つの峰にそれぞれの仏が当てられ、実際の風景に仏を当てはめて描かれている。正福寺のものとは仏の名が一部異なるが、富士山頂を八葉九尊の仏の世界ととらえていることは共通する。

一七世紀の書写年紀をもつ東泉院伝来の『富士山大縁起』(富士山かぐや姫ミュージアム蔵)には、赫夜姫は富士山のご神体であり、浅間大菩薩として人々の前に現れたとある。近世以前は神仏習合の



写真 5-36 八葉九尊図 (正福寺蔵)



写真 5-35 富士山八葉九尊 (正福寺蔵)

思想が一般的であり、富士山には仏（大日如来）とともに神（浅間大菩薩）も祀られた。「富士曼荼羅図」においても、村山の富士山興法寺には大日堂と神社が並び建って描かれている。富士山頂は八葉九尊の仏の世界であり、浅間大菩薩のいる聖なる場所として信仰されていた。

登山者

信仰対象である富士山（山頂）に対しては、古くは麓から遙拝していたが、やがて実際に登って信仰する者が現れるようになった。東泉院伝来の『富士山大縁起』には、赫夜姫は富士山頂の岩屋に入り、以降、富士登山が許されるようになったと富士登山の起源が語られる。伝説としては聖徳太子や役小角の富士登山が伝わるが、九世紀には実際に富士山頂に至った者がいたことがうかがえる。都良香（八三四〜八七九）の「富士山記」に、次のように山頂の様子が記されている。

広さは一里（約三・九km）余り、中央は甑のように窪み、なかから噴煙を上げている。虎が蹲ったような形の大岩がある。

虎が蹲った形の大岩とは「蹲虎岩」と呼ばれるもので、現在も山頂に存在する（写真5-38）。火口の形状とともに、実際の風景が記されていることから、当時、実際に富士山頂に登頂した者の話が伝えられ、記されたと考えられる。

中世には、信仰・修行のために富士登山を行う者が多く現れるようになった。『梁塵秘抄』には日本各地の靈験所の一つとして「駿河の富士の山」が今様に謡われ、当時富士山が修行の山と認識されていたことがうかがえる。この頃、富士山に登山した修行者として代表的な人物が末代上人（富士上人）である（本章第二節）。久安五年（一一四九）、末代は鳥羽法皇や都の貴族に呼びかけ写経した



写真 5-37 蓮嶽真形図（村山浅間神社・大日堂蔵）

経巻を富士山頂に奉納したとされる。山頂の三島ヶ岳麓から発見された経巻類（写真5-39）は末代が埋納したものと考えられている。吉田口五合五勺の経ヶ岳でも同年代の埋納経が出土しており、同じく富士山に信仰登山した者が埋納したと考えられる。

初めは修験者や僧侶などが中心だった富士登山は、次第に一般の道者にも広まっていった。「富士曼荼羅図」には山頂を目指す道者の姿が描かれている（本章第五節）。道者は山麓・山中の宗教施設を礼拝しながら山頂を目指した。仏の姿がある山頂付近には、松明を手にした白衣の道者や黒衣の僧侶が列をなして登って行く様子が描かれており、御来迎を礼拝するために夜間登山が行われていたと推察される。山頂に至った道者は、火口にいる大日如来（浅間大菩薩）を拝み、賽銭を捧げたと考えられる。

『富士山明細図』（個人蔵）には火口に向かって鳥居を構える初穂打場が描かれており、人々はこちらから火口を拝んで賽銭を投げ入れた。なお、この賽銭の取得権については江戸時代にたびたび争いになった。

また、大永二年（一五二二）には武田信虎が富士参詣を行い、「八要」を行った。これは八葉（八峰）にいる仏たちを巡拝する御鉢廻りと考えられる。永正一五年（一五一八）には、道者一三人が嵐により死亡し、「内院」（火口）より大きな熊（または大鬼神）が現れて道者三人を喰うという事件が記録されている。真偽はともかく、当時道者の登山が活発に行われるとともに、時に死亡事故が発生していたことがわかる。

山頂に奉納された仏像類

道者などは山頂に仏像類を奉納した。近世の地誌類である『甲斐国志』や『駿河国新風土記』などには数多くの仏像類が祀られた富



写真 5-38 富士山頂の景観
黄色枠の火口内壁左手にある大岩が蹲虎岩。



写真 5-39 富士山頂三島ヶ岳出土経巻
（富士山本宮浅間大社蔵）

士山頂の様子が記されている。これらのうち中世に奉納されたものを見てみると、剣ヶ峰の下には、延徳二年（一四九〇）の年紀と奉納者名が刻まれた鉄造大日如来像があった（本章第一節表5-1⑬）。剣ヶ峰の坂には天文十二年（一五四三）に美濃国住人が奉納した大日如来像（同表⑭）があり、大宮・村山口山頂の大日堂付近にも富士山興法寺辻之坊覺乗を願主とする大日如来鉄像（同表⑰）があった。ほかにも、山頂東側の東賽の河原には大永八年（一五二八）の年紀と尾張国からの奉納者の銘を刻む銅首鉄身大日如来坐像が祀られていた（同表⑳）。

富士山の本地仏である大日如来は数多く祀られたが、もちろんほかの仏の姿もあった。三島ヶ岳付近で発見された銅造虚空蔵菩薩懸仏（同表㉑）には「八躰内」と刻まれており、八葉（八峰）にそれぞれ懸仏が奉納されたと考えられる（本章第一節）。また、乾元二年（一三〇三）七月銘の地蔵菩薩立像（同表㉒）は、現在山から降ろされているが、元は初穂打場の左近小屋に奉納されていたものだという。『富士山明細図』に地蔵菩薩像などが描かれる東賽の河原（写真5-40）には、明応二年（一四九三）銘の鉄造観音菩薩坐像（同表㉓）があった。この像は現在、題経寺（柴又帝釈天〈東京都葛飾区〉、本章第一節）に祀られている。明治初年の廃仏毀釈の際に山頂から村山に降ろされて、後に題経寺に運ばれたという。この像をはじめ、富士山頂に祀られていた数多くの仏像類は廃仏毀釈により大半が山中から降ろされたり廃棄されたりしたといわれる。

中世の富士山頂は神仏の世界として信仰されていた。遠くから礼拝するだけでなく、剣ヶ峰や賽の河原など各所に仏像類が祀られ、登山期には道者などが登山し巡拝する聖地であった。

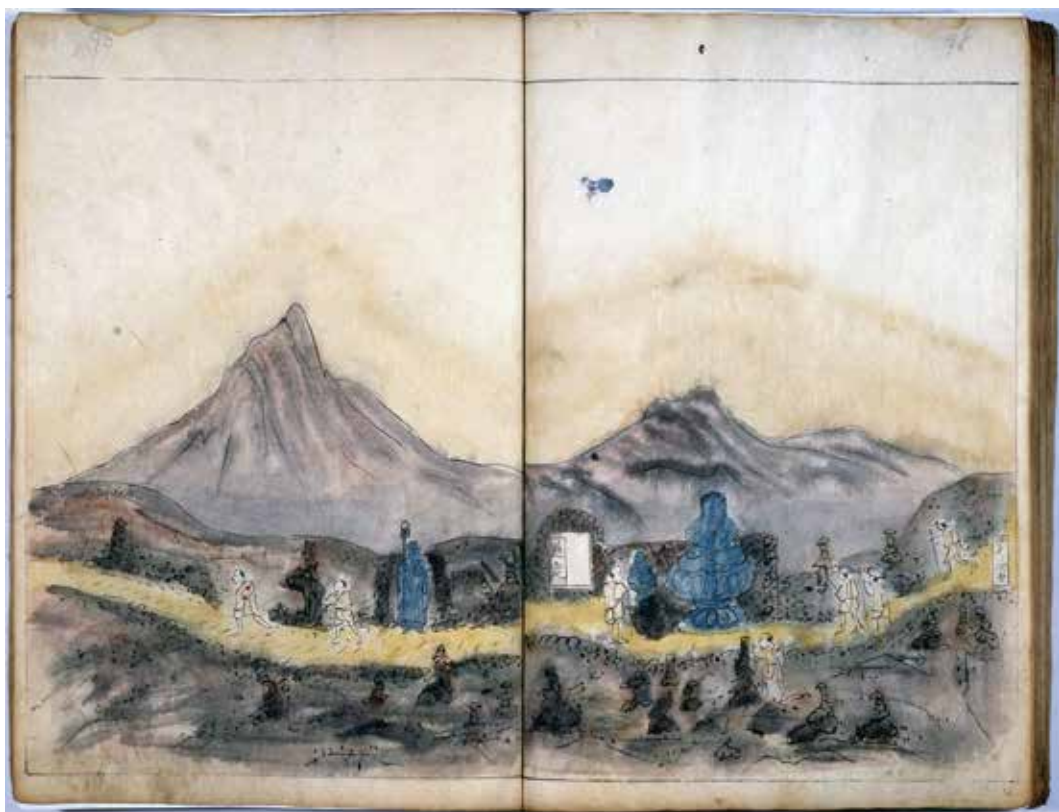


写真 5-40 富士山明細図（個人蔵、東賽の河原部分）

地獄の賽の河原に見立てて、石積み（画面下側）や地蔵菩薩像（中央左手）が祀られる。